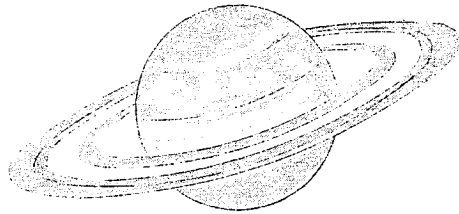


日本 G.A.P. ニュースレター

1 9 6 2

11 · 12



日本GAPニューズレター 1962・11月12月号

目 次

魂 と 心	G・アダムスキ	1
質 疑 応 答	C・A・ハニー	4
現代の宗教の起源	C・A・ハニー	9
トピックス		16
アダムスキ氏からの最近の私信		18
遊星の異変		19
必要な物は与えられる	G・アダムスキ	19
編 集 後 記		21

魂と心

ジョージ・アダムスキ

多くの人が求められている

けれども選ばれている人は少ない

地球の人間は二重人格者として生きています。すなわち「心」である現世の結果をより多く語り、「魂」である宇宙を云々することは少ないのです。そのために自分を現在の混乱の状態に置いています。これは長いあいだ「心」によってつくり出された慣習と因襲に人間が従う場合、特に真実なのであり、それらは「心」それ自体と同じほどに誤ったものです。要因を支配している恐怖が個人の魂に魂自体をあらわす機会を殆ど与えていません。

あらゆる生命はその残存を宇宙に頼っていて、その報酬として「供給」を受けてきました。ところが人間は供給を人間に頼っており、その結果恐怖が欠乏と疾病を通じて人間の生活を支配しています。「魂」は神なる「父」に奉仕をしようと大声で叫び続け

ています。それは「父」を知っているからです。しかし「心」は「心」自体に奉仕をしたがっています。それはまだ「父」を見たことがないからです。慣習は「心」の知らない物事を恐怖するようにと「心」に教えてきています。

万人が創造された目的を達成するように要求されているのですけれども、奉仕することを選んでいる人は少数です。この少数者でさえも自らの運命の完遂にむかって前進する人はまれです。彼らも持っている信念は魂のそれではなくて大抵は心の信念です。その証拠は存在しています。というのは「心」は自らがなす物事のすべてに功績を帰したがるからです。もし名誉を与えられないならば「心」は自身の安全性が存在していると自ら感じている慣習的・因襲的な生き方に立ち返ってゆきます。いいかえれば、「心」は人間を信じているのであって神を信じているのではないのです。しかし神なる「父」が万物の贈与者なのであって、人間ではありません。そこで人間は額に汗していわゆる「安全性」を獲得し続け、自身と同じような他人の「心」の奴隷になっているわけです。

絶滅の危険が我々すべてをおびやかしていた最も危険なときに「ブラザース」が来訪して、多くの人がそれにこたえましたが、悲しいことにそれに関心をとどめた人は少数でした。多数の人はこの世の報酬と安全とに立ち返って、これまでに人間の手のなかにおかれた最も輝かしい宝石を捨ててしまったのです。

これら暗黒の時代にキリストから「啓示」を受けたと称する人たちでさえも、心の意志というあのムチひもによって「心」の栄光と安全を求めて横道にそれています。このために、本来の目的

を固守している我々は、それを遂行するのに必要な援助を得ることができないような状態にたち至っています。

それゆえ再び申しますと、「ブラザーズ」を通じてもたらされた神なる「父」の教えは、この世の黄金と一時的な心の満足のために売られてしまったのです。

七十一年の生涯を通じて私は地球人が富と考えている物を集めたことには困りましたが、べつに困ったこともありません。私には毎日供給がありました。私は地上の如何なる富や安全よりも偉大な永遠の知識を得ています。私は自分を生み出してくれた「父」にたいする確固たる信念をもっております。そして「父」も私を無視したことはありませんし、私のあらんかぎりの力をもって「父」の目的に奉仕するかぎり、これからさきも「父」は私を見捨て給うこともないでしょう。人間の「心」は失望以外の何物をももたらしません。が、「父」は私を決して失望させたことはありません。

あなたがたはいくつかもありません。「しかし、神は自らを助ける者を助けるのだ」と。これもセンス・マインド(感覚器官の心)を守るために用いられている曲解なのです。ほんとうの意味は、「神は、神の意志を行なおうとして自らを助ける者を助ける」ということにあります。「あなたの(神の)意志がなされるのである、私の意志がなされるのではない」というのが真実の意味です。これを企てるまえにキリストから啓示を受けたと称している人々にひとつ質問をしてみましょう。「啓示を受けたというものが真実であるならば、一体なぜあなたがたは地上の報酬または他人の意見とひきかえにその啓示を投げ捨ててしまうのですか？」実

際にはこの種の啓示以上に大きな真理はありません。それは「宇宙の意識」によって与えられるからです。

ブラザーズを見分ける方法

以下の文はブラザーズの見分け方に関する多数の照介に答えたものです。他の遊星の住民は我々の創造者と同じ創造者の似姿をしていて、外観は我々と異なりませんので、この質問に答えるのは容易ではありません。

知識ということになれば、地球人がこれから学ばねばならない宇宙の事象について彼らは我々をはるかに凌駕しています。したがって誰かに話しかけてみさえすれば、その人がこの世界の人かそれとも他の世界から来た人かはわかります。しかしそのときでさえも、我々といえども宇宙についてはきわめて多くを学びつつありますので、断を下すことは困難です。もし人が理解力をもたず、自分や自分の創造者にたいして誠実でなく、この世界の人々の幸福や改善に関心がないとすれば、当人は文句なしにバカにされるでしょう。ここに一例があります。

私がパロマー山に住んでいた頃の或る夕方、一同が夕食のテーブルをかこんで座っていたとき、ドアを軽くノックする音をみなは聞きました。(そのときはひどく雨が降っていました)そこでドアをあけると、私を訪ねて来た一人の背の高いきれいな男が立っているのです。彼は地球人となんら異なるところはないうに見えました。なかへ入って一同のテーブルへ一緒につくよう

にとみなはすすめました。車は見当らず、どうしてここへ来たのか私にはわかりません。彼の質問は誰もが発するような性質のものでしたから、そこで一同は宇宙問題の話に入ってゆきましたがこれは少なくとも一時間続きました。ところが彼の話しぶりからみて、私たちはこの人は地球人ではないと断定しました。というのは、彼の答えは宇宙に関する地球上の如何なる文献にも見当たらないような内容のものであったからです。

会話のなかば頃になってその人が絶対に宇宙人であると私は感じましたが、居合わせた人のなかには後になって疑惑を表明した者もありました。しかし「ブラザーズ」との最近の会合で私ははからずもその人に会い、実は本人が当時土星の宇宙船の着陸スケジュールの責任者であったことを知ったのです。彼はあの夕方のことを私に思い出させましたが、以下は彼が語った話です。

「あなたがあのとき私の正体を見抜いた動機は、私の語った内容からみればさほど大切なことではなかったのですが、あなたの魂と心は一体となっていたために、あなたの魂が私の魂に気づいたのです。これは意識に気づく意識なのであって、心に気づく心なのではありません。居合わせた他の人たちは自分の心でもって私を判断し、私の正体と目的と疑問をもちました。こうして真相を知るために私の魂と融合することをしなかったのです。人々のなかには私たちがブラザーズであることを直接に私たちから聞きたがる人もありますが、それはできません。たとえ私たちが正体を洩らしても人々はそれを信じないでしょう。私たちはこれこれの遊星から来た人間だと言葉で語ったりしながら、あなたが期待する方法で自分の正体を明かすことは許されていないのです。

洩らしたところで教育のある人々は私たちの正体を信じようとはしないでしようし、結局自我の好奇心を満足させるだけのことでしよう。そんなことをするために私たちは地球へ来るのではありません。

奇蹟的な現象を見たがる人々もありますが、それは魔術師がやってみせてくれます。一体どうしたら私たちの正体を見抜くことができるのかという質問にたいしては、一つだけ回答があります。それは、あの夕方あなたが私にたいしてやったように、意識を融合させることなのです。なぜなら意識のなかに私たちは真理を見出すのであって、心のなかに見出すのではないからです。

私たちの宇宙船に地球の人々を同乗させる件ですが、これは地球では人々が真理についての知識を得ようというまじめな願いよりもむしろ好奇心から乗りたがっています。これは私たちが必要とする奉仕にとっては価値のないことです。ただし特定の人たちだけは多くの理由によって同乗の資格が与えられています。地球の殆どの人の肉体は長途の宇宙旅行に耐えることはできないでしょう。自分の意識を「宇宙の意識」と融合させることのできる人がきわめて少ないからです。快適な宇宙旅行を行なうのにはこのことが必要なのです。しかし喜んで自分の意識を「全体の意識」と融合させようとする人が一体どれほどいるでしょう。ごく少数です。なぜなら、これは意識の命令にたいして個人の個性または自我（センス・マインド）をいけにえに捧げることを意味するからです。そこでは心がその創造者にたいして召し使いになるのです。あなたの世界ではそうではないのですが、心は心自体のためにあり得るのではないのです。

あなた自身のグループのなかにはそのよい例がありました。人々は私たちとの個人的なコンタクトを求めており、人類の改善運動にのり出すまえに私たちから指示を得たがっています。しかし人々はまず自分の魂の意識を「宇宙の意識」と融合させることを知る必要があります。あなたは私たちと同様にそれを信念によってやりました。この地球へ来るたびごとに私たちは信念をもつ必要があるのです。宇宙には多くの危険があるからです。信念がなければ真理は決してあらわれないでしょう。信念をもたない人は真実の生命または幸福を知ることはありません。意識が真実の間なのであって、心ではないのです。意識は心を含む万物の父母です。肉体の心が自らの利益のためにのみ働くならば、それは「至上なる意識」に対抗していることとなります。

「至上なる意識」は肉体の心が知っているようには恐怖というものを知りません。なぜなら真理があるところには恐怖はないからです。そして存在する唯一の真理は意識のなかにあるのです。

私たちのために役立とうと望んでいる人は、少しづつでもよいのですから自分の魂の意識を宇宙の「全体の魂」のなかに溶け込ませる必要があります。そうすればその人は私たちと会ったときにこちらの正体に気づくでしょう。地球では多数の人々が気づかないで私たちに会っているのです。」

以上が一人のブラザーから直接に与えられた回答です。この内容を忘れないようにして下さい。かかる教えは直接に示されないことには自分でこのことを学びとることはできないからです。

質 疑 応 答

C · A · ハニ

〔質問一〕 あなたのニューズレター第三号の七頁に（注 ハニ氏のニューズレター）「アダムスキ氏は彼の著書がでっちあげであるという声明に署名をするようにと五万ドルを差し出された」とあります。それが事実とするならば我々はアダムスキ氏の物語を信ずるのに或る種の根拠を——ただの根拠ですが——もつこととなります。それゆえひとつ差出人の氏名、職業、住所その他の重要な事項を知らせて下さいませんか。そうすれば関係者外のもの我々もその声明の真相をもっと詳細に調査できると思います。

同じ線に沿って、我々多くの者は長いあいだ次の各事項に関する説明を求めてきました。(A)地上数フィートの位置に滞空していた円盤の近くに立っていた例の有名な金星人と合図によって話し合っているアダムスキ氏を双眼鏡で実際に見た目撃者は誰々か。(B)或る夜砂漠上で円盤内の装置を修理していた塔上員たちの一人によって投げ落とされた金属片を分析して非常に興奮と驚きとを示した冶金学者というのは誰か。(C)アダムスキ氏の有名な円盤写真類を現像して焼きつけた写真師や専門家たちは誰々か。(マサチューセッツ州 ローレンス、シル神父)

〔答〕 一九五八年にアダムスキ氏は右質問の最初の部分と類似した出来事について公表したことがあります。ただしこの場合は

アダムスキ氏の主張が正しいという確定的な情報を有していると述べた國務省のストレイス書簡がそれです。そこで人々が國務省へ照会したところ、同省はそのような手紙をア氏宛に出した事実はないと否定しました。五万ドル事件の場合も、もし当方が差出人の氏名を公表すれば、おそらく関係者側はそれを否定してよけいなトラブルを起こすことになるだけでしょう。

かかる状態におちいらぬようにするために、我々は或る種の出来事（複数）を秘密にしています。こうした事件に関する我々の側の声明を誰もが信じてくれるかどうかについて、私は不注意であるわけにはゆかないのです。人々は地球が平たいと信ずることもあるかもしれませんが、そんなことなら私はいささかも気にするものではありません。ゆっくりとしかも着実に事をすすめてやっておりますから、適当な時期が来るたびごとにかつて立証されなかった我々の側の声明を確証する情報が流れ出ているのです。これはひんばんに起こっていますので単なる偶然の一致ではありません。右の質問から見るとシル神父はアダムスキ氏の著書を注意深く読んでおられないことは明らかですから、科学上の傍証を少しあげてみることにしましょう。(1)月面に存在している大気層、(2)地球をとり巻いている大放射線帯（注 ヴァン・アレン帯）、(3)宇宙空間に存在するホタル火を放つ物体群。そのなかには光を反射していたのもあるし、自ら蛍光を放って輝いていたのもあった。(4)宇宙空間に存在する巨大な電流の層。以上の各事実の発見です。これらはアダムスキ氏の著書やパンフレットに述べられており、科学的に発見されたときよりも以前に書かれた事柄です。

今週も天文学者連は土星の大気中に地球のそれとよく似た水素

を発見したと声明しました。また学者が温室効果と名付けた現象に基づいて、他の遊星群にも地球と同様の大気が存在するかもしれないと声明した天文学者連もいます。

シル師がアダムスキ氏の最初の著書を（注 実見記）少し読んで見られれば、砂漠上でア氏と一緒にいた目撃者たちの氏名はおわかりになるでしょう。これは全然秘密ではなく、数年間公然と知られていました。彼らの現住所については、長いあいだ私のほうから連絡を試みていません。しかしこんなことはすべてその筋の調査官が徹底的に調べていますので、円盤問題について最近やうと興味をもつようになった少数の人の「気まぐれ」を満足させるために再びそんなことを掘りかえすのは時間と労力の浪費というものです。

例の冶金学者の氏名に関しては始めに述べたのと同じ理由で我々は極秘にしています。これは本人が結果を認めることに同意した場合、及び円盤問題に関する政府の秘密情報がすべて公開されたときにのみ発表するつもりです。現在本人やア氏の体験を確証している他の学者連は国防省の保護を受けています。

写真師の氏名と住所は彼の宣誓書とともに発表されており、数年前に官憲によって調査されました。彼は例の写真類について当初に語った言葉と全く同じことを現在も一貫して述べています。

（注 ア氏の円盤写真が真実なものであると語ったことを意味する）しかし彼の言葉を葬り去ろうとして「写真屋は死んだ」というデマが流された事実があります。例の写真類について彼が果たした役割は公然と知られていますし、その件でわずらわされることを彼自身も望んでおりませんので、私は彼の住所を知っては

います。公表はしなかつてもりです。

(質問二) 天文学者連は絶えず空を見ているのに、なぜ円盤やその他の異常な物体を目撃したという報告をしないのですか。

(F・N)

(答) 実は天文学者も円盤については多くの目撃をしており、それについて報告書を書いているのです。しかし一般大衆は天文学者の特殊な論文を読んだりしませんし、またいわゆる「権威者」が「天文学者は観測中に何も見はしない」といったところでそれは知らないからそんなことをいうのです。

H・P・ウィルキンズ博士によって書かれ、英国で出版された非常にすぐれた著書に「月面上の不思議な出来事」と題する章があります。(注 H・パーシー・ウィルキンズ著「我々の月」) 生前ウィルキンズ博士は月に関する名高い学者でした。その著書のなかで彼は多くの奇妙な不思議な物体が専門の天文学者連によって観測される事実を述べています。この書は現在入手難となっていますが、どこかの州立図書館にはあるかもしれません。

一九五四年五月十五日に英国サザンプトンのW・オリヴァー氏によってなされたすばらしい目撃体験があります。その報告書の一部を掲げることによきましょう。

「一九五四年五月十五日、土曜日の午後十一時三十分頃、私は月を観測し始めた。——各種の高倍率の接眼鏡を試みた後、私は四十五倍に切り変えた。十二時二十七分三十秒かきりに私は一群の鮮明な青色の光点が月に接近しつつある光景をとらえた。その光点群はV字型の編隊を組んで飛んでいた。そしてその物体が十四個あることがわかった。

私はそれらが月を横ぎるのを追跡したが、そのとき編隊は黒く見えた。そのシルエットから私は物体の形をたしかめることができた。すなわち、それらは平たくて中央部が突出しているのだ。再び数をかぞえてみると、全部で十八個あることが判明した。そしてダルトンティウスとキャヴァルリウスの噴火口の上を通過しながら西から東へ進行していた。

編隊が通過し終わってから私は望遠鏡をつかんで二百倍の接眼鏡にとりかえた。すると幸運にも月からかなり離れた位置に再びそれをとらえることができた。そしてV字形のこちらに近いほうの列をなしている物体群のすばらしい光景を眺めることができた。その列には八個が並んでいた。小型のものが三個、大型が二個、小型が三個といった順である。各大型機に明るい五つの窓があるのが見えたし、また小型機の突出した部分の周囲に明るく輝く小さな丸窓が並んでいるのも見えた。

この突出した部分については、二百倍の接眼鏡によってそれが小塔またはドーム形をしていることがわかった。大きさの相違は別として、全部の物体は外観上同じ型であった。

私の観測は約八分間続いたが、そのあいだ物音は聞かなかつたし、またジェット機や飛行雲なども見なかった。しかし観測の終わり頃になって、突然先頭の飛行物体のドームから赤い光がきらめいた——おそらく何かの合図なのだろう。だがドームの中心の輝かしい青い光には何の影響もなかった。その距離が遠くなつて正確な観測ができなくなるまで私はこの編隊を見つめ続けた。一月を研究している別な或る天文学者が、十二インチ望遠鏡によって二十五分間観測した事実もあります。これは一九五四年七月

八日のことで、午後九時三十分から九時五十五分にかけて発生しました。ここに本人の報告の概要を記すことにします。

「私は南方の空の約五十五度の高度に、金星に似た明るい星のような物体を発見した。しかしそれはあの輝かしい金星よりもっと明るく光っていた。そして何よりも金星は日の沈んだ空に低く降りていた。それで新星が出現したのではないかという考えが急に私の心にひらめいた。

私は十二インチ望遠鏡を操作するために天文台を開いた。その「星」はファインダーでは容易に見ることができたが、高倍率の接眼鏡のはるかに狭い視野のなかに空中のその位置をとらえることはできなかった。(注 ファインダーとは十二インチ主鏡に付属している小型の補助望遠鏡。六インチ程度の反射望遠鏡でもこうしたことがよくある) 貴重な時間を浪費するのを避けるために、私は低倍率の広角接眼鏡——五十倍、二十五度——に頼らねばならなかった。

私が見たものには思いもよらぬ驚くべきものであった。妙な形をした一個の銀色に輝く物体がいて、その左方にそれぞれ輝度の異なる小さな光体のように見える一群の物体が集まっているのだ。その光点群はたがい各目の位置を変えたために正確な数をかぞえるのはきわめて困難だったが、大体に十五ないし二十個くらいあった。

全体の光景はそれらが一つの大きな活動をしているような印象を与えたが、とにかく私がこれまで空中で観測した如何なる物とも全く異なっていた。私の妻も十二インチ望遠鏡によってその光景を確証した。

しかし光点群の動きが激しくなるにつれて十二インチ鏡で観測するのは困難になってきたので、主鏡を傾けようとして調整しているうちにそれらは視界からはずれてしまった。ただちにその位置を搜索し続けたいけれども再び発見することはできず、ついに雲が出て来たため、九時五十五分に観測を打ち切った。

私が受けた印象によると、その現象は非常な高空で起こっていたようである。たぶん成層圏の上層辺かまたはそれ以上の高所であろう。なぜなら閻間のなかに見えたその小さな星のような物体群は五十倍で見てもそれとわかる形を示さなかったからだ。特にそのなかの二個の物体は筆舌に尽くしがたい光景を呈していた。それらはあたかも金属の表面が太陽の光線を反射しているかのよう、旋回するにつれてきらめいたのである」

以上の報告は二つともデスマンド・レズリーが「ワールド・サイエンス・レヴュー」誌の一九五五年二月号に「空飛ぶ円盤」と題して寄稿した記事中の一部です。

大抵の天文台の望遠鏡は宇宙のはるか彼方に向けられていて、きわめて狭い視野のために、空間のほんの一部分しか見ることはできません。加うるに殆どの職業天文学者は望遠鏡を絶えずのぞいているのではなく、望遠写真を撮影しているのです(注 天文台の望遠鏡は一種の巨大なカメラである)。したがってフィルムには物体が通過してもただの流星の痕跡のようなものしか残らなういでしよう。

(質問三) この太陽系内の衛星のいずれかまたは全部に人類が住んでいますか。(アーカンソー州 L・F)

(答) ブラザースは我々の月に基地をもっていますので、そこ

には人間が住んでいるといえます。他の衛星、たとえば木星や土星などの衛星については私は知りません。人間がいる可能性はありますが、それに関して私はブラザーズやアダムスキ氏のいづれからも知識を与えられてはいません。大抵の人が考える以上にはるかか我々は宇宙やブラザーズについて知っていないのです。実察には我々は表面をホンの少しかきまわしただけのことなのに、多数の人々は私やア氏があらゆる回答を用意していると思つていられるように見受けられます。

〔質問四〕 ブラザーズが靈界は存在しないと絶対的に否定していることに対して私は全然同意できません。物理的な装置が高次の靈的波動をキャッチしないからといって、かかる波動が存在しないということにはなりません。死後人間の意識と靈体は地上ですごした生活のタイプにしたがって靈界の各層で生きるために肉体を去って行き、本人のカルマに応じて再び地上で生まれかわるか、または別な遊星で生まれるのだと思います。私のこの信念と知識は、少数の進化した人々が死後に生き返つて、靈界の存在すること及び永遠の昔から存在していたことを伝えた事実に基づくものです。

(ロサンジェルス J・D)

〔答〕 ブラザーズが我々に事実として語る話を信ずるか信じないかは全く各人の自由です。もしイエス・キリストが再現して何かの問題について語るとしても、それを受け入れるか投げ捨てるかは我々の自由です。

ブラザーズはただ議論を起こすために靈界の存在を否定しているわけではありません。ブラザーズが否定するのは靈界が存在しないからなのであり、我々の考え方が進歩するのを援助しようとし

ているからなのです。人間のとなえる説として我々が受け入れたり否定したりしているこうした物事をブラザーズは個人的にテストすることが可能なのです。多数のブラザーズは彼らの遊星で死んだ際に自分の生まれかわる場所を選ぶのであって、また前世の生活について完全な意識をもったまま生まれかわります。

ブラザーズのなかにはこの地球の人類にたいする「守護の天使」として働いてきたものもあり、地球人が幼児から高度に進化した遊星における大人にまで生長してゆくのを見守っています。地球の人類によって「偉大な導師」と称される人々が靈界は存在するのだと説いても、本人はウソをついているのではありません。本人たちはまじめにそのことを信じているのであり、「自分にとつては真理である物事」を伝えていくのですから。

このニューズレターをお読みになる方はすべて各記事の内容を自分で評価し、何を信じるべきかについては自分で決めるべきです。我々は誰のあとをついて行ってもいけませんし、ブラザーズにさえも盲目的に従うのはよくないことです。或るブラザーズやアダムスキ氏はこのことを実証することができます。彼らも自我にとらわれると地球上の大多数の人間と同じ程度になるのです。すると彼らといえども地球の人間に「誤った」忠告をするかもしれないし、それに従うのは大きな間違いだということになるでしょう。それゆえ、ブラザーズに話しかける場合すらも、我々は相手の忠告を受け入れるかそれとも自分の判断に従うべきかを自分で決める必要があります。各人はハジゴの各異なる段階の上にあります、それぞれが個々に進化しつつありますので、自分が信じたり信じなかつたりする物事に関しては少しづつ相違した意見をも

つでしよう。それはそうあるべきでしようが、いずれは同じ段階を昇ることになるでしよう。

〔質問五〕 ブラザーズから何かの印刷物を入手することができ
ますか。
(イリノイ州 J・M)

〔答〕 ブラザーズから出されたホンモノの印刷物だということ
を一体どうして認めることができますか。彼らは我々が使用して
いるような紙や印刷機を用いせんので、もしこの遊星上で印刷
物を作るとすれば印刷して配布しなければならぬでしよう。し
かしそれがブラザーズによって書かれ、発行されたのであると述

現代の宗教の起源 (1)

C・A・ハニー

序

イエスが生まれる数百年前に、別な「救世主たち」が「神の子
」として崇拜されていたことを知っていますか。イエスが生まれ
る数百年前に別な聖母、別な幼児キリスト、及び信仰の象徴とし
ての十字架が広く教えられて信じられていたことを知っています
か。イエスよりも四千年も以前に、現代の宗教的な儀式の八十五
パーセントまたはそれ以上が本質的には同じ形式で行なわれてい
たことを知っていますか。

よく知らない人には奇妙に思えるかもしれませんが、もとはキ

べてあったところで、あなたはそれを信じますか。内容によってのみ判断するよりほかに方法はないでしよう。このことについて
はかつて長い記事で詳説したことがあります。それはなぜ準備の
できている人にだけ知識が与えられるのかという理由を示してい
ます。或る人々はこのニューズレターから殆ど何も吸収しないの
に、或る人たちは記事の内容に関して前者とは全く異なる概念と
異なる解釈をしています。各記事中には多くの要点があらさま
に洩らしてあるのではないのです。

リストから出たと称している現代の各宗教のほとんどは、実際に
はイエスの存命申かその死後に起こったのではないのです。

このシリーズ中の知識は、宗教的及び非宗教的な史書から出て
来た間違いない実際的な発見によるものです。これは図書館の
棚を調査する労を惜しまぬ人なら確かめることができます。

このシリーズは如何なる宗教団体をも非難するものではありません。誰でも自分がこれはよいと思う宗教を信ずる権利をもって
いるのです。さまざまの教会や宗教団体は、「神からの啓示」を
特別に受けたと称してやっています。私は次の点を指適したいと
思っています。つまりこれらの各団体はイエスとともに始まった
のでもなければ、神とともに起こったのでもなく、長い時代を通
じて伝えられてきて、しかも現代の宗教から異教徒という汚名を
着せられている教団の教義と同じであるという点です。我々はこ
れらの各教義が真実であるか間違っているかを云々するのではな
く、歴史上の事実を記録しようというのであって、それらが神か

ら出たものか人間から出たものかは読者の判断におまかせしたい
と思います。

キリスト教系の各宗派は指標及び典拠として聖書を用いていま
すので、現代の宗教の教義と聖書に見出される教義とのあいだの
相違点を指適するために、聖書から多数の箇所を引用することに
しましょう。しかしこのことは聖書が正しいとか、それが私の信
念を裏書きしているとかいうわけではありません。ただ持ち出さ
れる多くのポイントの説明に応用されるだけです。また必ずしも
聖書の内容が誤っているというわけでもありません。なぜならブ
ラザースの会った古代の予言者たちにブラザースが与えた正しい
哲学を多くの例において聖書は述べているからです。宇宙的性質
を帯びたこの真実の哲学の多くは翻訳による毀損をまぬがれまし
たが、なかには元の意味がくずれてしまった部分も少なからずあ
ります。

さきに私は、「異教徒」の信仰ともとはキリストから出たと称
する教団（複数）の教義との類似性について述べましたが、この
類似性はキリスト教が発展しつつあった初期の時代に多くの混乱
と議論とをひき起こしました。

エドワード・カーペンターはその著「異教徒とキリスト教」の
なかで次のように述べています。「古代の伝説とキリスト教の口
伝による信仰との類似性はきわめて大きなものがあつたので、異
教徒は初期キリスト教徒の注意と激しい怒りをそそつた……た
だしキリスト教徒はそれをどんなふうにも説明したらよいかわから
なかつた。そこで彼らは、大昔に悪魔が異教徒に一定の信仰と儀
式とを採用させたのだという説に落ち着いてしまったのである」

古代のキリスト教神学者テルトゥリアヌスはいつています。「悪
魔が自分の偶像の秘教儀式によって、神の秘教儀式の大部分をさ
えもまねているのだ」コルテスは（注）メキシコを征服したスベ
インの軍人）、神がキリスト教徒に教えたのと同じことを悪魔が
たぶんメキシコ人にも教えたのだろうとぼやいています。

今日多数の教会は、自分たちがもっているのと同じ信仰を古代
の「異教徒」ももっていた理由を説明するのに、依然として右の
ような説明の仕方を用いています。彼ら教会は、如何なる事実が
イエスとその生涯につきまとうことになるかを悪魔は予知してい
たために、悪魔がこのような類似性をひき起こし、混乱を生じさ
せて人々を迷わすために、「真実」を模倣したのだと考えているの
です。

かかる大きな混乱をひき起こすおもな事は、昔の探険家によつ
て発見されていなかった地域にこの同じ教義が発見されたという
ことでした。幽霊、魔法使い、その他の妖怪を容易に信じた昔の
教会のリーダーたちにとって、このことは「模倣の「信仰をひろ
めた張本人が悪魔である」という証明になったわけです。

新約聖書を読んでみますと、古代の初期の教会は、今日キリス
トによって創立されたと自称している教団とはその信仰及び儀式
などにおいてははるかに異なっていたことがわかります。イエスは
彼の時代の宗教組織を攻撃し、ムチをさえとって寺院から両替屋
を追い出しました。トーマス・ペインが米国の初期にたいして急
進的であつたように、イエスも彼の時代にたいしては全く急進的
でした。ペンがすすむにつれて前記の相違を調べてみることにし
ましょう。

ここで再びエドワード・カーペンターの著書から引用しましょう。「キリスト教会は異教の討論から自己を厳密に分離させて、教会こそが独自の神の啓示を表明しているのだといった態度を保ちながら、このことを人類に訴えてきたために、結局教会が異教と同じ基礎から出発していること、教会の教義と儀式は異教のそれと混同されていることなどに気づいている人は現在ほとんどいないのである。一般の概念は、異教の神々はキリストの出現とともに逃げ去ったということである。しかしこれが事実を反していることはあらゆる研究家の熟知しているところである。記録されているイエスの出現の時代と、それ以前の数世紀のあいだ、多くの神々に捧げられた神殿があった。ギリシア人のアポロまたはディオニソス、ローマ人のヘラクレス、ペルシア人のミトラ、バビロニア人のパールとアスタルテ、その他多くの神々である。そしてここで一つの著しい現象が明らかとなってくる。すなわち、地理的な甚だしい距離、宗派間及び礼拝式の内容における民族的な相違などにかかわらず、各教義と儀式は大体において――全く同じではないにしても――著しく類似していたということである」

カーペンターはさらに次の意味のことを述べています。「数カ国の十一体の神々はクリスマスかまたはその前後に地下の洞穴で処女の母から生まれて、人類のために苦難の生涯を送った。彼らは光をもたらす者、癒やし手、仲立ち、救世主などと呼ばれた。彼らは人間の姿をした神であると信じられ、暗黒の力に打ち負かされて地獄すなわち下界へ墜落し、人類を天空の世界へ導くためにその先駆者となった。インドの神クリシュナの場合もキリスト

の生涯をきわめてよく似ている」

カーペンターの同じ著書の一三三頁には次のようにもいっています。「世の救済のために神がその子をつかわすという考え方は遠い昔からあったもので、古代のあらゆる宗教に流れており、礼拝式にそれが具体化されている」

歴史の記録によって、これまで我々は類似した儀式類と信仰が世界の各地に存在していたことを知っています。またこれらの各信仰がイエスによって始められたといわれている教義と殆ど同じであったこともわかっています。しかしそれはイエスの時代よりも数千年前に存在していました。いずれその儀式や信仰を列挙して解説する予定です。

ところでキリストの教えといわれているものがなぜ二千前間も続いてきたかを理解するのはきわめて容易です。これはその教義が神から出て他の多くの教義と同様に保護されたという事実によって生ぜしめられたのではなく、むしろキリストの生涯より四千年以上も前に人間によってつくられた儀式と信仰の存続なのです。注意深く調べてみますと、古代の各国家の教義や証拠によって我々はその避けられない結論に達します。すなわち、各教義は共通の起源をもっていたにちがいないということです。そして実際にそうだったのですが、これはこの稿がすすむにつれてわかってきます。

聖書には歴史の記録が存在するようになるずっと以前にあった或る伝説が含まれていますが、それはルシファー（悪魔）と集合させられた御使いたちの第三番目が、あらゆる逃げ道を断たれて地上におろされる状態について述べています。このようなことが

実際にあるとすれば、右の物語は「人類の記憶」から起こってき
たといえるでしょう。この伝説ははるか遠い過去に発生した事実
に基づいているからです。この事実、複数は、さきに述べた信仰
と儀式の共通の起源を調べようというこの稿に直接の関係があり
ますので、昔の思想の方向について続ける前にこのことに關して
少し書き加えておくほうがよろうと思います。

現代の人類の祖先は他の遊星や他の太陽系などから宇宙船で運
ばれて来ました。人間というものは概して平安と調和のなかに生
きることを好むのですけれども、なかには貪欲で利己的なのがい
て、個人的な自我と侵略主義を身につける場合があります。宇宙
の法則にしたがって生きることを人間にさとした教えがあるにも
かかわらず、これはときとして他の遊星にさえも起こるのです。

大昔、他の諸遊星の知恵の導師たちが会合して、かかる利己的
な人々を生命の維持できる別の遊星（複数）へ輸送することにき
めました。發達の段階において最低の遊星がこの目的のために選
ばれました。この太陽系中で最低の遊星は地球でした。連れて来
られた人々は太陽系の内外の多数の遊星から来た、「厄介者」だっ
たわけです。この人々のすべては傲慢な性質をもっていて、誰も
他人に一步もゆずろうとしなかったために、みずからの運命と調
和とを開拓するように仕向けられました。以下は発生した事実で
す。

この尊大な人々は何らの器具も家財もたせられないで移住さ
せられたのですが、これは自分たちの知識と性質だけをもって自
分自身の能力に頼るよう仕向けようとして行なわれたのです。
この人々が聖書でいうところの「墮落天使」であって、高度の

生活状態から下りて来て現在の世の中に見られるような状態のタ
ネをまいたわけです。

まもなくこの人々のあいだにリーダー群が現われましたが、こ
れはすでに各人の出身遊星別にしたがって種族を編成していた首
長がなったのでした。リーダーのなかにはしばしば他の種族を侵
略しようとしたのもあり、既知の世界のすべてを支配下に入れた
例もありました。数百年が過ぎてから彼らが残したものは、彼ら
が天空からやって来た民族であるという伝説だけでした。宇宙船
がときたま来ることもありましたが、まもなくこの時折の来訪
も、「天空から来る神々」または「地球を訪れるために来る」「天使
たち」と考えられるようになったのです。当時の地球人のなかで
進化して自己のレッスンを学んだ人たちは、ときどきこの宇宙か
らの訪問者によってコンタクトされることがありましたので、そ
の結果大衆から神の「予言者」とみなされました。大衆は迷信と
独裁のもとに生きていたために、一般人よりも頭のよかった連中
はこの迷信につけこんで大衆を利用したのです。

各リーダーは神の象徴とみなされて、後には神自身と考えられ
ました。彼らは太陽、月、或る種の動物といった自然の物象と同
一視されるようになったのです。この古代の民族のほとんどすべ
ては太陽と月の崇拜者であり、自分たちの理解できなかった物の
ために神々をつくり出しました。彼らは自分たちの出身地と地球
の栄光よりもはるかに偉大な栄光が地球外の空間にあることをお
ぼろげに記憶しているようでした。しかし墮落した地位から天空
の世界へ復帰しようという彼らの内なる欲求も僧侶階級によって
逆に利用されたのです。

この背景から我々の史書に載っているような古代の「大文明（複数）」が起つてきたのであり、また記録された歴史上の出来事が展開し始めたわけです。以下各種の信仰の起源をたどってみることにしましょう。

第一部 古代バビロニアの土地

あらゆる文明の古代の文献に記録されているあの洪水の後、現在シュメル人として知られている人々がシャイナーの土地に大いなる文明を築き始めました。シャイナーは古代バビロニアの土地として知られており、ティグリス、ユーフラテス両河の下流に位置していました。この文明はその全盛期において当時知られていた世界の殆どすべてを包括していたのでした。そして世界の最初の大君主であるニムロッドがその妻セミラミスとともに人々の支配者となりました。

残存している最古の記録によりますと、この古代の原始宗教はもろもろの生命力にたいする崇拜をもとにして築かれたというところで、万物の尺度である人間はこれらの力を産出と再現の霊（複数）、人間の家族におけるような男と女の霊という言葉で表現しました。そして三番目の象徴が幼い男子の神（子供）というかたちで加えられていました。これらの古代の神々は「三位一体」すなわち男、女、子供と考えられたのです。

この古代民族の大支配者たちは神々の代理人とみなされていましたが、後には人間の姿をした神自身と考えられました。このバビロニア王国の周辺の各国も神や女神についてこれと大体に同じ

考えをもっていました。各種の神にたいしてはそれぞれ異なる名前をつけていました。

ニムロッドは次第に強大な権力をもつようになり、まもなく周囲の版図を一手に収めました。当時は太陽とヘビが殆ど全般的に神の象徴として用いられており、ニムロッドとセミラミスは人民の代表となっていました。二人は神聖視され、人間の肉体をもった神の生まれかわりとみなされていたわけです。この古代の宗教での著しい特徴は、あらゆる人類を救うために「救世主」が生まれて来ることになっていくという考え方があったことです。

ニムロッドが突死をとげたとき、セミラミスはこの古い教義を思い出して、ニムロッドの唱えていた太陽とヘビの崇拜教を救世主の出現思想と結びつけて両者を融合させようとした。

現在の学者によって翻訳された記録によりますと、彼女は死んだ夫のニムロッドをこの救世主に仕立てあげることになりました。そして超自然的に生まれかわったニムロッドの母親の如く見せかけて自分が一大権力を獲得しようとしたわけです。ニムロッドの名は民衆のあいだに広く知れわたっていましたので、彼の死はその後数百年間も儀式などにおいて悼まれていました。このニムロッドを記憶にとどめようという民衆の強い欲求のためにセミラミスは自分の計画をきわめて容易に達成することができたのです。生前ニムロッドの臣下の殆どは彼を神として崇拜し、彼の勢力は当時の世界の殆どに及んでいました。死後セミラミスは彼を人類の救世主にしようとした。しかしどうしてこれができたのでしょうか。彼女は美しい女であって、彼女とニムロッドの容貌はすでに民衆のあいだでよく知られていました。

「かくて巧みに企てられた策略は功を奏した。セミラミスは神とあがめられていた亡夫のために栄光をにない、やがて兩名はレア及びニン、すなわち女神なる母とその子という名のもとに信じられないほどの狂信状態で崇拜され、その肖像はいたる所に安置されて礼拝されたのであった。ニムロッドの黒い顔が障害になつた場合に必要なのは、新しい王子ニヌス（生前のニムロッド）は未亡人の腹から超自然的に生まれた、きれいな顔付きをした、父の死後に生まれた子であつて、これこそニムロッドの生まれかわりなのであると大衆に教え込むことだけだつた。（ヒスロップ著「二つのバビロン」六十九頁より）」

バビロンの僧侶たちはこの母なる王妃と王子は直接神につながる導管であると大衆に教え、それは文句なしに信じられました。セミラミスは神の霊によつて子をはらんだのだと僧侶が説き、それを民衆は受け入れたのです。幼児が誕生したとき、それは人間の肉体をもつた神の化身として、ニムロッドが超自然的に生まれかわつたのであるといわれました。そして彼の生活にまつわつて起こつた種々の奇蹟的な出来事に関する物語が流布されて、人々に信じられました。ところが実際には異なる時代に新しい救世主が続々と生まれたために、これに類似した話がその後長いあいだくり返されることになつたのです。

しかし大衆のすべてが盲目であつたわけではありません。やがてこの種の崇拜にたいして抵抗が起つてきました。皮相的な儀式主義は儀式の慣例をつくり上げてしまつたために、民衆は神殿のなかで礼拝をする際に実際には何が行なわれつつあるかを知ろうとしなかつたのです。神秘儀式と古代の友好主義が生じてきま

した。参加者だけに知られる神秘的な像がニムロッドとセミラミスの像にとつてかわり、それが礼拝されましたが、そのことはセミラミスや僧侶たちには問題ではありませんでした。いずれにしても黄金の供物が彼らのところへ来たからです。

この儀式が古代バビロニアの神秘儀式の土台そのものになつたのです。この新しく生じた宗教の儀式に参加する人は、原初カルドゥー語で「ペテル」と呼ばれる称号をもつた司祭長によつて神秘的な神像（ヘビ、黄金の子牛など）の意義を説明されました。

「ペテル」とは説明者を意味する語で（パルクルストのヘブライ語辞典による）、本人の仕事は儀式の参加者が実際にはセミラミスとニムロッドを礼拝しているということを知らないでいるままに参加者へその神秘儀式を説明することになりました。キリストよりもだいたい以前にローマにいたのはこの説明者すなわち「ペテル」たちの一人だつたのです。彼はキリストの時代の使徒ペテロと混同されていきました。

変わりゆく世界の各地へ民族が四散するにつれて彼らは新しい宗教的な儀式を伝えてゆき、へんびな地方でさえもその土地の言葉でさまざまな神の名をもつようになりました。その名はみな異なつていましたが、それらは前記の「三位一体」からなる同じ神と一致することが理解されていきました。

セミラミスはエジプトでイシス、ギリシアでケレス、シリアでアスタルテ、ローマでシベレと呼ばれており、ニムロッドはエジプトでオシリス、フェニキアとアッシリアでタムツ、ギリシアとローマではバックカスと呼ばれました。これについては大体学者によつてよく知られていますが、こうしたことにくわしくない人に

とって、これはセミラミスとニムロッドのとなえた教義が如何に各地へ広がり始めたかを示しています。

各種の神々が実際には異なる名前のもとに同じ実体を表わしていたという証拠として、別掲の大英博物館所蔵クサビ文字原本の翻訳文を参照して下さい。(注　ここでは省略)別な原本ではニムロッドが各種の神々に変化していることを完全な表にしています。このようにして一つの神がしばしば異なる都市で異なる名のもとに姿かたちを変えて崇拜されたのです。原本中の或る個所ではニムルタとオール神々の集まりが等しいことさえも示しており、他の神々は単に彼の体の一部にすぎないとしています。ニムルタはニヌスすなわちニムロッドを意味します。

如何なる名前で知られていたにせよ、各国でセミラミスは「神の聖母」となり、そのまま崇拜されました。彼女の「説明者たち」はまもなく聖なるもの不敬なるもの両方にわたってあらゆる知識を独占してしまい、その秘教に入信した人だけが知識を得ることを許されました。バビロニアの人民はやがて僧侶階級によって完全に支配されるようになりました。彼ら人民は僧侶階級にたいして盲目的かつ絶対的な服従を示さなにかざり、「救われるために何が必要かを教えられなかったのです。

この支配を保持するために僧侶によってザンゲ室が設けられました。キリストよりも四千年以前のことです。如何なる狂信的な婦依者といえども僧侶にたいしてあらゆる行為をザンゲすることを要求され、そのザンゲが行なわれるまでは完全な入信は認められませんでした。「かくてギリシアの儀式に見られるようなサルヴェルテというのは明らかにバビロンに源を発するこの堅信礼を意味するのである。デルファイからテルモピリーに至る全ギリシ

ア人はデルファイの神殿の秘密の儀式に参加させられた。秘密を守るようにと命じられたあらゆる事に関する信者の沈黙は、偽誓が発覚した場合の刑罰の恐ろしさによって保たれたし、また入信式後の強制的な会衆一般唱和による「告白」―それはすなわち会衆の無分別を恐れる理由を僧侶に述べるよりも、僧侶の無分別の恐ろしさをもっと大きいという感を起こさせるような告白式なのであった。(ヒスロップ著「二つのバビロン」九頁より)―

「信者の秘密の欠点、短所、罪などのすべてを本人に告白させる大きな目的は、自己の魂の内奥の感情や最も重要な秘事を打ち明けた相手(僧侶)の権力のなかに民衆を掌握することにあつた。(右の十頁)告白式を發展させたやり方に基づいて、この古代の僧侶は自分たちこそ神の秘教に関する真実の知識の唯一の宝庫であるとなえたのです。

私がかかる習慣を必ずしも非難するものではありません。ただこれが聖書やまたはキリストの時代に起こってきたものではないということを示しただけです。バビロニアの各種の起源から流れを汲む改宗者が教会へ殺到して、そのような習慣が教会へ入ったのです。自己の宗教を変えるのが容易でなかった新しい婦依者の忠誠をもっと楽に獲得しようとして、かかる告白の習慣が多くの他の儀式や信念とともに採用されました。これは、婦依者の首に一本の剣がおかれて、改宗者になるかそれとも死者になるかの選択権を与えられることによって簡単に改宗させられたのをみてもわかります。

中世では、その告白が「自分の魂を救うこと」を意味するものと思われた場合、教会は誰をも殺したり責めたりすることは考えませんでした。(以下次号)

ト ビ ッ ク ス

青い遊星

軌道を三回まわった後、スコット・カーペンターは輝く青色を帯びた地球の地平線が如何に美しく見えな
かを興奮して語った。彼の説によると、もし月から地球を眺めると地球は明るい青色の輪のように見えるだろうという。

ところがこれはただの美的な表現なのではない。カーペンターは大気圏外を飛行中に地球の地平線を六十枚も撮影して、そのフィルムはマサチューセッツ工科大学へ送られた。この大学ではかねてから月旅行から帰還する際の航路について研究していたのである。

同大学の物理学者連はカーペンターが宇宙船に持ち込んだフィルムの各コマの左半分を青色フィルムで覆い、右半分には赤色フィルムをかけておいたが、この目的はそのいずれの部分に地平線がよく写るかを測定することにあつた。「パイロットが大気圏内へ安全に突入するためにはただ一つの狭い通路だけがある。そしてパイロットは地球と宇宙船間の距離を正確に知っていないければならない」とマックス・ビーターセン教授は説明した。

赤色フィルムで撮影された部分にはきれいな雲が写されていたが、ビーターセンによれば帰還するパイロットがこの雲の高度を知るのとは不可能と思われるので、宇宙船の位置を計ることもできないだろうという。

青色のフィルターの部分には地球は暗くかすんで出ていた。し

かし大気圏の最上層部はきわめて明瞭で、鮮明な青い帯のように現われていた。これはレイリー散乱効果のためである。つまり大気圏の上層部は太陽の光線の青色の部分の殆どを反射する、いいかえれば、散乱させるのである。だから空が青く見えるのだ。その散乱現象は三十マイルの高度でバツタリやんでいて、そこできわめて鮮やかな線がつけられている。とにかくカーペンターのおかげで今後の宇宙飛行士は地球への帰還に際して信頼し得る道路標識を見出すことになるだろう。

引力発生機

アイザック・ニュートンの頭上にリンゴを落とさせた引力なるものは宇宙のあらゆる力のなかで最も明らかなるものであるけれど、それはまた最もとらえがたいものの一つである。電気、磁気、原子核などの力とちがって引力はきわめて弱いために、恒星や遊星という巨大なハカリがないとはかれない。ところが目下メリーランド大学で具体化しつつある野心的な実験によると、人間はついに研究用の人工引力を作り出すことができるかもしれないという。

海軍兵学校を出て物理学者に転向した四十三才のジョーゼフ・ウィーバー博士の指導で行なわれているこの実験のおもな目的はアルバート・アインシュタインの一般相対性原理を新たにテストすることにある。そしてその特別な目標は、はかない引力波をそれ自体、すなわち引力のエネルギーの基本的な単位であるいわゆる「グラヴィトン」である。アインシュタインによれば、相互に影響

響しあう如何なる物体——二重星からゴム球に至るまで——は引
力波を発生するとなっている。

政府の援助のもとにウィーバー博士のグループの世界で最初の
引力波発生機を建造している。これは真空の室内に入れられた厚
さ八インチ、長さ五フィートの円筒からできていて、操作にあた
ってはその側面に接合されたピエゾ電気の水晶体によって一秒間に
一、六五七回伸縮させるのである。(以下省略)

ティアアファナコの不思議な機械

ティティカーカ湖(注 ペルーとボリヴィアとの間にあるアン
デス山脈中の大湖。海拔三、八一五米。世界最高位。面積九、〇
〇〇平方Km)の近くのティアアファナコに古代の荒廃した都市が残
っている。これはアイマラス・インディアンによって世界最古の
都市といわれており、西紀前一万五千年から四万年のあいだに建
設されたと考えられている。

このティアアファナコのおもな記念物は古代の太陽の神殿である
「プエルト・デル・ソル」(太陽の門)である。ソ連の考古学者
アレクサンドル・カザンチエフはこれが「金星の暦」であること
を発見した。その門の上にある帯状裝飾壁に「天文学的な金星の
一年」を明瞭に示す一連の象形文字が刻まれているのである。

ソ連の共産党機関紙「コムソモルスカヤ・プラウダ」紙はその
暦について次のように述べている。「その太陽の門の裝飾壁に刻
まれた文字は約一万五千年前のものであることを示しており、イ
ンカ以前の伝説的なコン・ティキ族から出たものであるが、これ

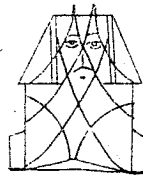
と、最近ソ連の科学者が金星の自転周期について電波の反射によ
る方法で得た天文学上の資料のあいだには驚くべき一致がある。
(A)ソ連の科学者V・コテニコフによると、金星の自転周期はその
遊星の軸の傾きがゼロになった場合は地球の十一日に相当し、傾
きがゼロでない場合は地球の九日と少々に相当することが判明し
たという。かくて金星の一年は金星暦で二十四日ということにな
るだろうとコテニコフはいつている。(B)プエルト・デル・ソル
の石造の暦は二十四の文字からなる十組の絵模様を示している
が、これは明らかに金星の公転周期に等しく、別な二十五の文字
からなる二組の絵模様は金星暦のウルウ年を意味している。
以上の事実からして、「おそらくコン・ティキ族の天文学者は
金星の自転周期の秘密を知っていたにちがいない」とソ連の科学
者たちはいつている。

その象形文字はまた或る不思議な機械(複数)を表わしている。
すなわちそれにはすばらしい「モダンな」エンジンの設計図が描
かれてあるのだ。(1)自動操縦の潜水艦(2)最近ヒューズ
航空機会社によって発表された宇宙旅行用のイオン・
ソーラー・エンジンと全く同じ型のエンジンなどであ
る。この情報はフランスの科学者によって確証された。
かくて「プエルト・デル・ソル(太陽の門)」「は太
古に金星人と地球人が関係をもっていたこと、コン・
ティキ族が宇宙飛行をマスターしていたことなどを示
す石造の証人なのである。(フランスの画報「ル・モ
ンド・エ・ラ・ヴィット」より)

と　　び　　つ　　く　　す

アダムスキ氏からの

最近の私信



私の土星旅行に関する記事を載せた文書をあなたは受け取ったことと思います。私はブラザーズによって指示されたのですが、この次にとるべき段階についての情報をいずれお伝えするつもりです。この情報はハニー氏のニューズレターを通じて一般及び各国のGAPリーダーに流されることになっています。これは円盤とは関係ありません。しかし健康な状態で生き続けようと望む人ならば誰でも興味をもつはずで、というの、我々や子孫がこの世界にいないとなるというのならば、我々が人間らしく生きるためになにもこの世界の善を促進する必要はないからです、だいちスペース・ブラザーズが我々を援助しようとしているからです。すなわち戦争があるまいが、もし核実験が続いて有

害な放射線が大気の上層に蓄積されるならば、人間は絶滅の運命をたどることになるからです。そこで我々の手始めの事は先ず「生きる」ことであり、次に健康な生活を好む人をしてできるだけ得ることであり、そして如何なる国が核実験を行なおうともそれに反対する手紙を各自の政府に送り、政府にかかる武器を所有する国へ国民にかわって抗議文を送らせることにあります。我々が生きながらえて現在もち得る生活上のよき物事を楽しもうとするのならば、この核実験は中止されねばなりません。ブラザーズは我々に方法を教えてくれています。それゆえ超高空、深海、地下の如何にかかわらず、核実験反対運動を始めるようにGAPの全リーダー及び社会一般にも呼びかけるつもりです。この計画はただちに始められる必要がありますので、ハニー氏のニューズレターで二カ月にわたってその方法を述べることにしています。

あなたがこれまでに示して下さった協力にたいして感謝しますとともに、あなたのグループが日本の同胞にこの知識や実験の危険性を伝えるために全力をつくしてあなたとともに活躍されることを望むものです。我々は家のなかに新しい家具をおくまえに先ず掃除をしておかねばなりません。ただしこの運動で暴力を用いることは極力避けるべきです。

一九六二年九月十一日

ジョージ・アダムスキ

(注 以上は編者宛に直接よこされたものです。)

遊星の異変

先般十月十一日付の毎日新聞に木星の「濃化現象」について詳細な記事が出ていたのをご存知だろうか。すなわち木星の表面は

大気でおおわれていて明暗のシマ模様をつくっているが、最近これに大きな変化が起こり、このシマ模様のうち南赤道シマ北組織と呼ばれるあたりに暗点が突然見え始め、南組織に向かって急激にひろがっているというのである。この濃化現象についての原因は不明だが、今度のは非常に珍しい。南赤道シマ大かくらん「現象になる可能性があるらしい。ところが異変は木星ばかりでなく太陽系の多くの遊星の表面も一せいに荒れ模様を見せていることが観測者のあいだで知られていて、たとえば金星の表面にも大雲塊の如き模様が出現しているし、英国の有名な天文学者パトリック・ムーア氏も土星の本体に見えるオビにこれまでになかった斑点を認めてそれがさまざまに変化している旨を報告した。しかしこれらの異変の原因や模様の正体は天文学者間でも全くのナゾとされているという。

ここで我々は「この太陽系全体に異変が起こりつつある」とアダムスキ氏がたびたび述べてきた言葉を思い出すとともに、「太陽の磁極の逆転」ということが何となく頭にコビリついてくるのである。

(編者)

必要な物は与えられる

ジョージ・アダムスキ

聖書によれば、神は地球の人間に多くの才能を与えたとあります。これは神が我々各人に地上で何らかの奉仕をするように割り当てたことを意味するかもしれませんが。これを我々は人間の運命または目的といっています。だからこそ多様な考え方が存在し、同じものは一つもなく、そのことが人生を価値あらしめているのです。

宇宙的な想念の型と個人的な想念の型とのあいだには考え方に相違があります。宇宙的な型は宇宙的な才能を表わしていたのであって、その才能をもって人間はこの地上におかれたわけです。個人的な想念は個人の自我を満足させていたのですが、それは人間の存在の目的に反しています。

宇宙的な想念とは何でしょうか。宇宙的な考え方をする人は「自己」をなくして普遍的な言葉で考えます。一例としては肉体の苦痛を除去するための解決法を探しながら研究室で不眠不休の努力を続けている医師をあげるとよいでしょう。彼は自分になりたいとする報酬を考えてはいません。解決法を発見したならばそれを世間へ伝えます。そうすることによって彼は自己の運命を遂行する

ためにもって生まれた才能を応用しているわけです。

一方、個人的な理想は宇宙の目的からの分離をひき起こします。というのは、その理想がそれ自体を満足させることによって才能を誤用しているからです。これはあらゆる才能の授与者にたいする信義の欠乏をあらわしています。一例をあげましょう。私は三つの才能に恵まれていた若い女性を知っています。彼女はすてきな声をもっていて、或る楽器の音色を正確にまねることができ、またダンスにおいて生まれついた才能を有しています。しかし彼女はこれらの才能のいずれをもすばらしいものだとは信じませんでした。彼女の個人的な性質はかかる才能を存分に發揮させることが不可能だと感じたからです。彼女は庇護者をもつために結婚による身の安全をはかることによって才能の發揮という前途を無視しました。

この個人的な振舞から如何なる結果が起こるかを少し考えてみることにしましょう。先ず第一に彼女は決して幸福にはなれないでしょう。というのはせっかくな才能があったのという哀惜の念は絶えず自分を苦しめることになるからです。彼女が求めた身の保障はたいしたことにはならないでしょう。ところが、役立たせるように与えられていた才能をもし彼女が発達させたならば、その報いは無限なものとなり、身は確実に保障されることになったかもしれません。彼女は疲れ果てた人々に慰みをもたらすことによって非利己的な奉仕をなしたかもしれません。

次に別な例をあげることになります。或る人は生命の神秘に関する知識を求める人々にそれを説明する能力——創造者から与えられた一つの才能——をあらわしていました。しかるに才能の授与

者を信じないために、現在は身の安全保障という理由で平凡な仕事をもっています。かかる人も幸福を見出してはいません。なぜなら本人の才能は個人の将来の目的にかなったあらわれ方を切望するからです。

一九二六年に私は金持ちになるチャンスを与えられながら西部で仕事をしていました。ところが或る日私には自分が思い出し得る限りの遠い昔にもったことがあると感じた宇宙的な感覚がよみがえってきました。

しかしこの転向の機会が訪れる日まで私は公衆の面前で所信を述べる信念や勇気をもってはいませんでした。そのときでさえも私は二週間もそれを無視したのです。これはその転向の好機を實現させる私の能力にたいして全く自信がなかったためです。加うるに私の仕事には経済的な保障がありましたが、新しい分野にはその保障はありませんでした。しかし私の過失ではなかったのですが仕事にちよとした出来事が起こって失敗してしまい、私はやむなく新しい分野に入らざるを得なくなりました。現在私は何の後悔もしてはおりません。なぜなら私はもって生まれた才能を發揮しながら生を受けた目的を遂行しつつあるからです。

いま私は財産というかたちでの保障をもってはいませんが、一般人の考え方によるいわゆる保障よりもはるかに大きな永続的な保障をもっています。私はこれまでに何も望んではきませんでした。日々が必要な物をもたらしますし、私が全力をあげて創造者の目的に役立つかぎりこのことは続くでしょう。

以上が「利己」という言葉と「人間の宇宙的な潜在能力を信ずること」という言葉で考えるとききの相違です。

編集後記

◎ このほど高文社から出版されました「空飛ぶ円盤の真相」について早速多数の絶賛と激励のお手紙をいただきました。厚くお礼を申し上げます。あの訳書は全訳ですから、かつて本誌に連載しました概略で意味不明の箇所もあの書をお読みなればよくわかりになると思いますが、惜しいことに校正のミスで誤字がかなりあるのが気になります。たとえば貪欲(どんよく)というのが多いうちに貪欲(ひんよく)となっていていますが、これは原稿どおりの字でなくて全く校正の不手ぎわによるもので恐縮しております。

◎ アダムスキ氏著の「テレパシー(精神感應)」も改訳新版を出すべく目下或る出版社と交渉中です。今度は全面的に改訂が施してありますので、これもぜひ活字にして一度皆様方に目を通していただきたいと思います。これはア氏の「宇宙哲学」と合本にするつもりでしたが、そうするとかなり分厚い本になって不便になりますので、やはり別々にすることにしました。

◎ 「多数の円盤関係の書物のなかで、真実を述べた少数の書の一つである」とア氏が確証したフランク・スカリーの著書 *Behind the Flying Saucer* も遠からず原書を仕入れて内容を紹介したいと考えています。私は数年前、この原書を手にとってもみないうちから他人の罵倒の言葉が先入観となつて、この書の内容を頭からインテキだときめてかかったのですが、こうした態度そのものは少なくとも全く間違っていたことを痛感しています。とにかく

あらゆる文献をできるだけ先ず読んで、私の「心」という部屋のなかを二つに仕切り、一方に「私にとって」価値があると思われものを置き、他方には価値のないものを置いてそれらを知識として貯蔵しておくだけにとどめています。この場合「感情」という尖兵の干渉を極力抑制するわけです。こうしたやり方について理論的にはア氏から教示を受けましたが、身をもってその範を示してくれたのは私の親友である米人宣教師の R・E・カニンガム氏です。私にとっては常人とはまるで異なる人物のように見えるこの人の円盤問題にたいする態度について書きたいことが多くありますが、紙面の都合でそれができません。

◎ 普通郵便に現金を同封してはいけないことになりましたのでタイプライター購入寄金及び誌代のご送金には振替をご利用下さい。(久保田)

通巻第十三号

日本GAPニューズレター 1962 11月・12月号

編集発行人 久保田 八郎

発行所 島根県益田市益田古川

本GAP
振替・松江二六三〇
(久保田八郎個人名義)

印刷所 益田 タ イ プ

昭和三十七年十二月十日発行

頒価一〇〇円(送料共)